

# 無責任エッセー 旅のハジの書き捨て

福崎かずたろう

ということで、私は今、千里中央で地下鉄の車内にいるのだ。時間は午後8時13分。今からちょっとした旅行に出ようかという、まさにその瞬間なのだ。行き先は……教えてあげない。知りたければ先を読むんだな、ふふふ。あつ、中を飛ばして読むというのはナンにしてね。

今から書こうとする内容はすべてリアルタイムである。旅行必携のメモに逐次、書いていく内容なのだ。だから、時には微に入り細をうがつようなこだわりを見せ、時には何も書いてないというのもアリなのだ。そういうことにするのだ。ということで今8時17分、あと1分で発車だ。オルゴールが鳴っている。

桃山台で、私の前に若造が座った。若造は一心不乱にヤングマガジンを読んでいる。自分も以前はそうであったが、漫画を読みふける若いオトコというものはどうにもバカ面である。バカ面若造の隣のにーちゃんは大型の雑誌を読んでいるが、よほど凛々しく見える。たとえ雑誌の内容が HOW TO ○○だろうが、漫画が弘兼の人間交差点だろうが、漫画を読んでいる人間より雑誌を読んでいる人間の方が賢くみえる。なぜだろう？とフト考えてみる。内容的にはどちらにも良いもの悪いものもあるわけで、これはあまり関係が無い（と言えないこともないこともないが）だろう。そう、読む人間の内容は大同小異なのだ。しかし、両者の見てくれは、確かに違うのである。

ここで、私が3分間考えた結論を発表してしまおう。いいか、言うぞっ漫画と雑誌とでは、”目の焦点の移動距離に差がある”のである！ どうだ、驚いたか、バカ面若造め。君の読んでいる漫画という読み物は1ページあたりの文字としての情報量が少ないのだよ。だから目があっちに行ったりこっちに行ったりで、はたから見てみると落ちつかないのだ。分かったかな。これからの君の取り得る道はただ一つ、「丹念に絵の一つ一つをなめ回すように観賞する」。これしかない。そうすれば、もう少し凛々しくみえるだろう。それから隣のにーちゃん、君も雑誌を読みながら、ぷっと吹き出すのはやめなさい、せっかく凛々しく見えているのだからね。さて、私は文庫本でも読むことにしよう。おっ、江坂だ。OLが多いぞ！

ということで、御堂筋線を本町で降りて、ホームをどんどこんどこ歩いて行って階段上がって通路を右に左にブラウン運動したのち中央線に乗った。

そして、弁天町で降りた。

そろそろ目的地を教えてあげようかな。今から弁天埠頭に出る。夜の海にバカヤローするのではない。お楽しみの車をからかうのでもない。高松行きの船に乗るのだ。目指すは四国、なのだ！　ということで、埠頭まで夜の道を歩くのは恐いので（別に、襲われるとかいうんじゃないで、道に迷ってしまって船に乗り遅れるのが恐いのよ）、バスターミナルからバスに乗った。発車まぎわに、バスの横から青年が飛び出してきて、運転手に、・あわあわ、・・・揺れて字が書けない・・・。

ということで（最近このフレーズが多いなあ）、バスが揺れて書けなかった。リアルタイムだなあ。さっきの事件は、もう過去のことだから、省略！

いま、弁天埠頭である。たった今、2等切符を買って、待合室のベンチの上なのだ。時間は9時20分。横に座っている5・6才の女の子がちらちらじいーとこちらを見ている。何を書いているかが知りたいようだ。あいにくだが、おちょうちゃんには読めない大人の字ばかりですよ。あと15年くらいしたら見せてあげようね。と私は寡黙にメモを取り続けることで、それを彼女に語った。ま、それ以前に、私の字はミミズのたうち悶死字なので、大人でも読めないけどね。

出航10分前に改札が始まった。待合室から歩いて1分、「ぐれいす」丸、小さな船である。ぐれいすという名前はなんか、愚連隊とか、グレたとか、人生灰色とか、なんかそんな暗いイメージを感じてしまう、奇妙な名前なのだ。

で、名前はどうでもいいのだが、実に小さい船体で、いかにも頼りなげである。2等室は船底にあるので、この船沈みし折りは、容易に脱出はできまい。これが私の棺桶になるのか、などと考えてしまう。

## 第1回 終わり